



近くて遠い土地 - 「樺太」。

図や写真でわかりやすく紹介する講演会を特別企画しました。
是非お越しください！あなたも意外な接点に驚きます。

樺太のポーランド人の軌跡

—彼らはどこから来て、如何に生き、どこへ帰ったのか—

日本とポーランドとの繋がりについては、今までもいろいろな場面で語り継がれてきたが、意外にも身近なところで接点があったことを知るのである。それはサハリン島の一部が日本領樺太であったとき、残留ポーランド人と呼ばれる人々が僅かに存在していた。

樺太時代には彼らは何故かロシア人と呼ばれて、正しくポーランド人と認識することはなかった。これらに加えて1920年頃には、ロシア革命後の混乱から亡命ロシア人とか亡命ポーランド人と呼ばれる人々も一緒だった。1930年頃には、これらの人々は全て「白系ロシア人」と呼ばれるようになった。

ところが、1990年頃から彼らはロシア人ではなくポーランド人だったことを知るのである。彼らは、1918年、ポーランド独立後は、ポーランドのパスポートを取得し、何時の日にか母国に帰るための準備をしていたのであるが、樺太時代に母国に帰る機会を訪れなかった。彼らは、樺太時代に日本の教育を受け、ロシア人との差別化を図っていたのであるが。

この歴史の流れの中で、あるポーランド人一家の軌跡を辿ることで、彼らの真の姿を知りたいと思う。



講演者紹介
尾形 芳秀

(おがた・よしひで)

1937年、樺太の豊原に生まれる。樺太の残留や亡命ポーランド人とともに旧市街で育ち、遊び、同じ学校で学んだ貴重なご経験から、その時代の真実を語っていただきます。

Дом Осипова

Владимировка - Тоехара - Южно-Сахалинск



樺太の人々にとって、ポーランド人の風俗習慣はヨーロッパの文化を知る新鮮なものだった。樺太の主都「豊原」には、数家族のポーランド人が住み、中でも「オーシップ家」の住むログ・ハウスは、この街の旧市街にあり一番大きく目立つ建物だった。サハリンで発行されている「ソビエツキー・サハリン」(2011年9月7日付)紙に幻のように掲載されたのである。私はサハリン州立大学やサハリンの歴史研究家にその所在を伝え、発掘のきっかけになったのであるが・・・。

～ 講演会へご招待します ～

「樺太のポーランド人の軌跡」

◆日時：2012年3月31日(土)
14:00～16:00

◆場所：かでる2・7
510会議室
(中央区北2西7)

◆主催：北海道ポーランド文化協会

◆お問い合わせ：☎011-790-8610
参加無料
事前申し込みは不要です。
直接会場へお越しください。

現在では、特に目的のない普通の散歩の他に、近い人々や病人を訪問することもある。そして翌日、復活祭月曜日は「lany poniedziałek 水かけ月曜日」とも呼ばれ、「śmigus-dymigus シミグス・ディングス」が行なわれる。もともとキリスト教以前のスラヴ民族の風習だったものが、後にキリスト教の復活祭月曜日と結び付いたのである。「シミグス」は、病や穢れから身を清めるために、柳や椰子の枝で足を叩いて互いに水を掛け合う春の習慣だった。この「病や穢れ」が後に

「罪」に代わった。「ディングス」は、イースター・エッグを差し出す代わりに水かけを勘弁してもらった習慣である。2つの習慣は15世紀頃に結びついたらしい。また、ポーランドの一部の農村では、復活祭の日の出とともに農夫が自分の畑に聖水を振り掛けてまわる風習があった。この場合、水は多産と生命の象徴である。この風習は、現在でも南部ポーランドに残っている。なお、キリスト教では、水は「罪」を洗い、新しい命を与える洗礼と結びついている。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)

第59回例会報告



企画してよかった!

2012年3月31日、ポ文協の第59回例会「樺太のポーランド人の軌跡—彼らはどこからきて、如何に行き、どこへ帰ったのか」が、かでの2・7、510会議室で開催されました。当日は、春嵐が吹き荒れる悪天候にもかかわらず、会員10名、一般17名の計27名の方々にご参加いただきました。

例会では、当協会の運営委員である、樺太豊原会の尾形芳秀さんが講師を務めてくださいました。北海道庁赤レンガ館にかかる一枚の写真から始まったお話は、樺太の地に生きたポーランド人たちの苛酷な運命、彼らと日本人との交流、アイヌ研究者ピウスツキのことなどを話題にし、樺太を舞台にした大きな歴史ドラマを見る思いでした。

会場にお越しいただいた皆様も、歴史の重みとそこで懸命に生きた人々の姿に思いをさせ、大きな感銘を受けたご様子でした。お話の後には、「ピウスツキは蠟管をどこから手に入れたのか」など聴衆から矢継ぎ早に興味深い質問が出ました。講師の尾形さんは、ご自身の体験から関心を持たれたテーマに関し、幅広く資料渉猟し、またサハリン、ベルリンなど海外にも足を運び調査され、実証的でありながらも、「血の通った」お話をしてくださいました。書物の狭い世界に閉じこもりがちな大学教員である私は、襟を正されるような思いをすると同時に、企画して本当に良かったという思いでいっぱいになりました。(佐光)

～講演会～

樺太のポーランド人の軌跡

—彼らはどこから来て、如何に生き、どこへ帰ったのか—

- ◆ 日時：2012年3月31日(土) 14:00～16:00
- ◆ 場所：かでの2・7 510会議室
(中央区北2西7)
- ◆ 主催：北海道ポーランド文化協会

講演者の

おがた よしひで
尾形 芳秀さん



心を驚づかみにされた講演会

尾形さんは1937年、樺太の豊原にお生まれになり、樺太の残留や亡命ポーランド人とともに旧市街で育ち、遊び、同じ学校で学んだという。樺太の敗戦前後の状況を知る人を探し続け、多くの偶然に導かれ重要な証言を得る。また、数奇なご経験を貴重な映像を通して聴衆に提供していただき、自ら樺太を語り継ぐ方だったのだ。渾身の講演会にはひたすら感謝し、そのリアルさに驚くばかりだった。

樺太は不思議な島だった。北方少数民族が住む自然豊かな島、間宮林蔵が調査に行き半島ではなく島であることを証明した島。日露混在時代を経て、ロシア領になった時代。帝政ロシアによる流刑囚の島の時代。日露戦争後は、日本軍の全域占領の島。そして、現在は国内で発行されている地図なら南樺太は日本とも、ロシアとも違う色に塗られている島だ。

さらに驚いたのは、参加者の関心の高さだった。尾形さんのお話真剣な表情で耳を傾ける中には、釧路・旭川近郊からもきてくださった方。その場で入会してくださった方も。今後の協会の企画力に一石を投じてくださった貴重な講演会になった。(民間)